



Hamamatsu Museum of Musical Instruments

浜松市楽器博物館だより

No.15

1999.3.31

遊牧民の楽器～モンゴルの大草原より～まもなく開催!!

期 間：平成11年3月27日(土)～5月6日(木)

場 所：浜松市楽器博物館 第3展示室

観覧料：大人600円、中人300円、小人150円(常設展観覧料含む)

草原の緑、青い空、草の香り、満天の星空。私たちが失いかけてしまった大自然と共存しながら生きてきたモンゴルの人々。彼らの多くは、家畜から得られる乳製品や肉を食料とし、羊の毛のフェルトで作ったゲルという円形テントを住居とし、現在も広大な草原で遊牧生活を営んでいます。

モンゴルは今でこそユーラシア大陸の東を国土としていますが、かつてこの国の人々は広大な草原を遠征し、13世紀にはユーラシア大陸をほぼ手中に収めました。彼らはそこで様々な文化を吸収し、遊牧とともに独自の文化を育んできました。しかし近年、革命により民主化され、現在は政治、経済そして文化などすべてが激動の時代を迎えています。音楽や楽器もそのひとつです。今回の特別展ではこのような過渡期にあるモンゴルの音楽と楽器を紹介します。

なお本特別展に出品する楽器75点は、当館が平成9年度に実施したモンゴルフィールドワークで収集したもので、その成果をあわせて報告します。



大草原で演奏する遊牧民 (左：馬頭琴、右：ガルモン)

■主な展示楽器

モリソール：棹の先端に馬の頭の彫刻がついた2弦の弓奏弦楽器。モンゴルの最も代表的な楽器で馬頭琴として有名。モンゴルの民話「スーホの白い馬」の中にでてくる楽器としても広く知られています。

ドンブル：中央アジアによく見られるギターに似た2弦の撥弦楽器。カザフスタンからモンゴルまで遊牧してきた人たちが使っていたもの。

フソール：馬頭琴の棹の先端の彫刻を白鳥にしたもの。

ガニラン：ラマ経(チベット仏教)で使われる大腿骨(だいたいこつ)で作られたラッパ。

ガルモン：遊牧民がロシアからモンゴルに持ち込んだボタン式アコーディオン。

リンベ：指穴が6つのモンゴルの伝統的な木製横笛。

ツァン：ラマ教で使われる真鍮(しんちゅう)製のシンバル。

ホンフオチル：ラマ教で使われる手持ちベル。日本の五鈴と同型。

ダマル：ラマ教で使われる人間の頭蓋骨(ずがいこつ)製振り鼓。

■関連講演会「モンゴル～歌と叙事詩の世界～」

講師：楊 海英 (ヤン ハイイン・中京女子大学助教授)

日時：平成11年4月24日(土)14:00～16:00

会場：アクトシティ浜松研修交流センター 聴講無料・4/2より電話申込受付(定員60名)

メキシコ楽器紀行～平成10年12月フィールドワークから～

日本の約5倍という広大な国土を持つメキシコでは、それぞれの地域ごとに自分たちの自慢とする音楽と楽器を持っています。まず、メキシコ音楽の中で最もポピュラーな「マリアッチ」、その元祖は、メキシコ中央部に位置するハリスコ州、あるいはすぐ南に隣接するミチョワカン州にあるといわれ、未だにお互い自分たちのほうが元祖だと主張しあっています。

現在のマリアッチに使われる楽器は、ヴァイオリン、トランペット、ピウエラ(フレットのない小型ギター)、ギタロン(6弦のバスギター)ですが、ハリスコ、ミチョワカンに残るマリアッチの原型の音楽にはトランペットは使われず、賑やかな中にも繊細さを残しています。また、ハリスコでは、低音部にギタロンに代わって大型のアルパ(ハープの一種)がよく使われます。

アルパは、また、メキシコ東岸部に位置するベラクルス州のシンボル楽器でもあります。ここではアルパが大きいものから小さいものまで複数台使われ、歌の伴奏に低音部から中高音部まで華やかな音楽を奏でています。

現在、テレビ、ラジオから聞こえてくるのは、ほとんどが隣国アメリカの音楽という状況ですが、そんな中メキシコの民族音楽を伝え残していく場として、メキシコシティ内に「メキシコ民族音楽文化センター」が設立されています。ここはいわゆるカルチャーセンターで、20年ほど前まで工場として使われていた建物をを校舎として使用した質素なものにすぎません。が、メキシコでは何枚ものCDを出している有名なピアニスト、アルパの本場ベラクルスで、何代にもわたってアルパの演奏と製作を続けている第一人者など一流の講師陣がそろってメキシコの伝統音楽を教えています。年間で、1,200ペソ(約13,000円)の授業料を払えば誰でも彼らの授業を受けることができます。

校長先生のダニエル・ガルシアさんが、「先生も生徒も、とにかく音楽を楽しむことがこの学校の唯一の目的」と何回となく語っていたとおり、ここに通ってくる4歳から80歳にいたる生徒さんたち(しかも年齢に関係なく机を共にしています)が、忘れかけた自分たちの民族音楽を自然体で無理なく吸収していく姿にこの国の豊かさを感じました。(M.M.)



メキシコ民族音楽文化センターの授業風景

興味津々

この間、川島勝の「井伏鱒二、サヨナラダケが人生」(97年8月10日、文藝春秋)の文中に面白い記事があった。要約すると次のようである。

太宰治の最初の奥さん初代さんが、太宰から離別され、生家に引きとってもらった間、井伏鱒二の家に待機していた。

彼女の家財道具の中に山田流の箏があり、この箏は井伏家で保存していた。

ある日、井伏は江戸時代の箏の名人、葛原勾当(くずはらこうとう)をモデルとした短編に関する事で、山田流の箏の先生である古川太郎を招き、初代さんが残した箏の音の鑑定を依頼した後、この箏を買ってもらおうよう頼むと、古川氏は「私がこの琴の調子を合わせておきますから、風の吹く日に、窓のそばへ立てかけておかれるとよろしいです。松籟(しょうらい)なんかとまた違って、微かに、いい音が湧きますから」と言った、とある。

ヨーロッパには「エオリアン・ハープ」と言って、同音に調弦した箱型の発音装置を窓に挟み込み、そこを通り抜ける風によって弦を振動させ、そこから発する音を楽しむ文化があるが、日本でも箏の調子をあわせて、音を楽しむ人がいたのか、と驚いた。

ところで、風の強い我「遠州」にも風による弦が織りなす「うなり」を楽しむ「うなり風」の文化がある。

浜松市の北、浜北市では、五月の節句時に「ぶか風」と呼ぶ「うなり風」をあげる風習が今でも残っている。これは、風に糸を付ける時、藤の皮や鯨のひげなどを薄くそぎ紐状にして、風の上部に弓形に付すものである。風をあげるとそれに風があたり「ブーン・ブーン」と低く鈍く鳴り、その音を楽しんだ。

尤も今は、藤の皮や鯨のひげに変わり、幅広のビニールテープが用いられている。(O.G.)



浜北市ぶか風保存会 提供

楽器アレコレ

フォルテピアノとデュエット用ピアノ

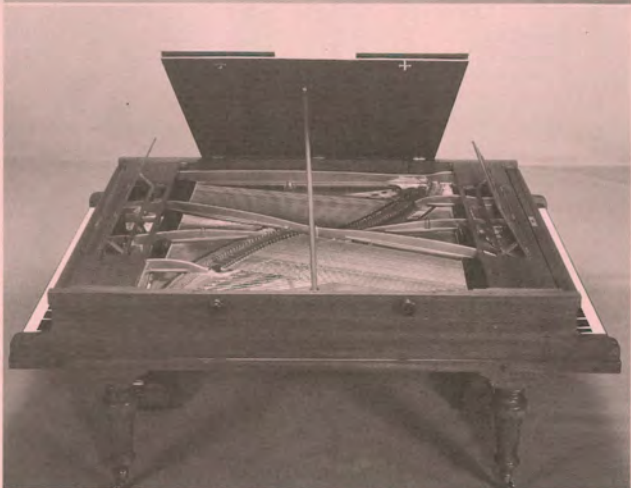
昨年12月と本年1月の2回、楽器博物館所蔵ピアノを使ったコンサートがありました。アクトシティ音楽院による世界の楽器のレクチャーコンサート第4回「不協和音～ハイドンVSベートーヴェン～」(12月6日[日])と第5回「ふたりのためのひとつのピアノ～華麗なるピアノデュオ～」(1月23日[土])がそれ。会場の研修交流センター21音楽セミナー室には両日とも約150人の聴衆が詰めかけ、それぞれ19世紀始めと20世紀始めのピアノの響きを堪能しました。

まず第4回では、1802年頃のロンドン、ブロードウッド製68鍵ピアノ(写真上)と1815年頃のウィーン、シュトライヒャー製73鍵ピアノ(写真中)を使用。小島芳子さんの演奏でハイドンとベートーヴェンのソナタを披露。この当時のピアノは構造上、現代ピアノと区別する意味でフォルテピアノと呼ばれます。現代ピアノよりも小型、軽量で弦の張力も弱く、本体に金属フレームを使っていないことなどが特徴ですが、そのためか、響きは温かくて繊細。奏者にとっては指のコントロールがとても難しいピアノです。

ブロードウッド製は音域が5オクターヴ半。18世紀末までは音域が5オクターヴだったピアノが、19世紀にかけて次第に音域を広げて行ったことを伺わせます。脚に直接付くペダルは左が弱音、右がダンパー(音を伸ばす)。18世紀までの膝による押し上げ式ペダルから、現代ピアノのような中央に付くペダルになるまでの、過渡的なペダルの好例です。

シュトライヒャー製は音域も6オクターヴになっています。当時のピアノは数年単位で音域を広げていったのです。また他の機能も考案されました。写真を見るとペダルが4つあります。1つはダンパー、2つは弱音機能なのですが、残る1つ、右端のペダルはドラムと呼びます。踏むとピアノ内部に組み込まれたバチが胴をドンドンと叩くのです。これは、トルコ行進曲など、当時流行したトルコ風の曲を演奏する時に使いました。

続く第5回は、2台のピアノを1台にまとめた珍しいデュエット用ピアノ。1925年フランス、プレイエル製(写真下)。本体には金属フレームが入り鍵盤はそれぞれ88鍵230弦で、現代ピアノと変わりません。演奏は野村眞理さんとライナー・コイシュニツクさん。デュエットによるドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」とストラヴィンスキー「ペトルーシュカ」は、さながら油絵のような深い陰影と豊かな色彩の音色。2台分の音がひとつのピアノから出て来るのですが、独特のブレンドされた響きで、「ひとつの楽器」を実感させました。「当時オーケストラ曲をピアノで演奏する機会も多く、そのため多くの奏者が演奏出来るピアノが必要だった」のも、このようなピアノが生まれた理由のひとつと考えられますが、考案の動機などは不明です。(K.S.)



平成11年度の催し物

事業名	日程	内容
展示室ガイドツアー	毎月第1・第2・第4・第5日曜日	博物館の職員が展示品の解説を行います。
ミュージアム・サロン	毎月第3日曜日	博物館の職員が楽器とその周辺文化を紹介するワンポイント・ミニ講座です。
特別展 遊牧民の楽器～モンゴルの大草原より～ 講演会 「モンゴル～歌と叙事詩の世界～」	4/1(木)～5/6(木) 4/24(土)	モンゴルの楽器や音楽について紹介します。 講師：楊 海英(中京女子大学助教授)
企画展 わくわく楽器ランド	7/22(木)～8/29(日)	楽器のしくみを体験しながら学べます。
企画展 ビーチャラドン遠州の祭と太鼓 講演会 遠州の太鼓	9/30(木)～10/24(日) 10/11(月)	遠州の祭と太鼓について紹介します。 遠州地区の祭囃子保存会などの実演もあります。出演：掛塚屋台囃子保存会ほか
海外フィールドワーク速報展	12/4(土)～12/26(日)	楽器や音楽文化についての海外調査の速報です。
国内フィールドワーク報告会 浜松楽器風土記	1/23(日)	浜松の楽器造りの技術伝承について調査したものを報告します。
国内フィールドワーク報告会 三遠南信芸能調査・中間報告会	2/26(土)	三遠南信地域の郷土歌舞伎について調査したものを報告します。
新着資料展	1/27(木)～2/20(日)	平成11年度に収集・寄贈された資料を紹介いたします。
特別展 メキシコ・グアテマラ楽器紀行	3/25(土)～3/31(金)	メキシコ・グアテマラの楽器と音楽を紹介いたします。

お知らせ

○レファレンスコーナーに新しい映像資料が入りました。

フィールドワーク報告ビデオ

- 川合の花の舞(約5分)
- 今田の花の舞(約5分)
- 西浦田楽(約5分)
- モンゴルの馬頭琴(約6分)、モンゴルの様々な音楽と楽器(約6分)

○展示替えを行いました。

アジア・アフリカ展示室には韓国やミャンマーなどの楽器を、初期国産洋楽器コーナーにはオルガンやピアノなどを新しく展示しました。

11～1月の観覧者数

大人	13,087
中人	398
小人	2,499
幼児	764
合計	16,748

博物館日誌12～2月

12/13(日)	展示室ガイドツアー「ラッパの仕組み」
12/20(日)	ミュージアムサロン「アンサンプルの楽しみ」
1/10(日)	展示室ガイドツアー「鍵盤のついている楽器」
1/17(日)	ミュージアムサロン「打楽器いろいろ」
1/26(火)～2/21(日)	新着資料展
1/30(土)	国内フィールドワーク報告会 浜松楽器風土記「ピアノづくりの変遷1」
2/14(日)	展示室ガイドツアー「楽器の素材を見てみよう」
2/16(火)～3/22(月)	海外フィールドワーク速報展
2/21(日)	ミュージアムサロン「ふえ～日本の横笛～」
2/27(土)	国内フィールドワーク報告会 三遠南信芸能調査報告「郷土歌舞伎のいま」

利用案内

開館時間：火曜日～日曜日 午前9:30～午後5:00

休館日：月曜日(祝日にあたる時は開館)、祝日の翌日、年末年始、
その他資料整備等のために定める日

一祝日前後の開館日については、変更することがございますので当館にご確認下さい。一

観覧料：	個人	団体(20人以上)	団体(80人以上)
大人(大学生以上)	400円	320円	240円
中人(高校生)	200円	160円	120円
小人(小・中学生)	100円	80円	60円

※館内には、貴重品以外のお荷物は持ち込みできません。

浜松市楽器博物館だより

1999年3月31日発行

No.15

編集 浜松市楽器博物館

〒430-7790 静岡県浜松市板屋町108-1

TEL.053-451-1128

FAX.053-451-1129

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社